

画像資料と民俗誌

倉石 忠彦(國學院大學文学部教授)

倉石です。よろしくお願い致します。この学術フロンティアにつきましては、当時大学院委員長だった小林(達雄)先生のご提案によって、日本文化研究所、あるいは小川(直之)先生に働きかけをして始まったという事で、当時から関わっていたんですけれども、こうして機会を与えて頂きました。できるだけ有効に使わせて頂こうと思っています。

実は、OHP も今日が初めてなんです。機械を使う機会がなくて、上手くいかどうか自信がありません。もし齟齬がありましたらお許し頂きたいと思います。

「画像資料の可能性」という題で、民俗学における画像資料を、民俗誌との関わりについて少し考えてみたいと思っております。といいますのは、画像資料を民俗誌として扱うことは出来ないだろうか、という思いがあるからです。お手元にお届けいたしました簡単なレジメにそって、お話をさせていただきます。

1. 民俗誌

「民俗誌」と申し上げましたが、民俗誌の概念規定につきましては、必ずしも一定した見解が出されているとは思われません。取り敢えずはレジメに示しましたように、まずは「一定の生活空間や集団における伝承文化を体系的に把握し、記述したもの」と考えておきたいと思っております。つまり、私達の生活の中に遍在する民俗の発見と再構成の過程を経て作り出された、民俗的世界。それが民俗誌だろうと思っております。つまり、別の表現をすれば、民俗の顕在化の過程であるということが出来ようかと思っております。

私は、生活文化を連続の視点から捉えようとするのが、民俗学の基本的な視点であると思っています。そして、現在我々が生活している、生活そのものが民俗であるとも考えています。つまり民俗というのは、あまりにも身近にありすぎて、普段は意識する必要もないような存在であるという事です。従って、これがそうした連続する文化の存在なんだと認識し、確認するのが民俗学の1つの役割でもあるとも思っております。それを具体的・個別的な事象としてではなくて、体系的な把握と記述のなされているものが、民俗誌であると考えたいわけです。そこに記述の問題が出て参ります。

2. 民俗誌の記述

勿論、具体的な民俗事象が重要ではないという意味ではありません。そういう民俗事象が民俗の存在を確認するものであり、また保証するものだからです。そういう存在を、民間伝承として把握し、資料として羅列的に記述する。それが調査報告書になる訳です。

ただ、生活そのものが民俗だ、ということになりますと、民俗事象も個々に孤立したものではなく、様々な条件下において、様々な関係を結びながら、私達の生活を作り上げている訳ですから、それらの個別民俗事象を関係付けながら、生活を把握しなければならない、ということになるかと思っております。つまりそれは民俗的生活世界の再現を行うことになる訳です。その再現したものは普通、文字表現によってなされております。しかし生活というのは当然、精神的世界も含む訳ですから、そこには、「モノ」と「ココロ」とを同時に把握しようという志向性も存在する筈です。そういう精神世界は、物や形、あるいは行為として具体化されるものであるわけです。

ともかく、民俗誌的な民俗世界の再現には、まずは民俗的生活世界の把握が必要である、ということになります。それは民間伝承の体系的把握というものが伴うものだろうと思っております。

その民間伝承の把握の為に最もわかりやすい視点を提唱したのは、柳田國男でした。柳田は、民間伝承の存在を、見る・聞く・感じる、という私達の五感を通して認識しようとした。そして、見る事が出来るのが第一部。耳で聞く事が出来るのが第二部。心で感じたのが第三部です。それは同時に、第一部は生活諸相とされます。すなわち、生活の様々な姿です。第二部の、耳に聞こえる言語資料というのは、その生活諸相を解説するものです。そして、そういう姿や生活を解説する背後に「観念」というものがある。その生活観念というのは心で感じられる、と柳田は考える訳です。先程の言葉でいえば、これが「ココロ」であり、「モノ」ですね。「モノ」はあるいは「コト」でもあります。

こういう、五感を通して把握しようというのは、誰でもが容易に認識できる、という事があったからなんだろうと思います。ともかく我々の民間伝承の背後、すなわち一番根底にあるのは心意伝承である、と考える訳ですね。こういう考え方は「モノ」より「ココロ」により重点を置こうとする姿勢があるからです。従いまして、民俗誌でも「ココロ」を把握し、記述しようとする志向性というものが強く見られました。目に見る事が出来ない「ココロ」をどう把握するか、という事が問題になってくる訳です。

かつて国立歴史民俗博物館の民俗展示の時に、最も議論を呼んだのがこの点でした。「ココロ」を展示しなければ意味がない。それでは、目に見えない、形のない「ココロ」をどう展示するか、という事です。その結果が所謂「坪井曼荼羅」の提唱であったわけですね。それが具体化されたものが、歴博の民俗展示という事になります。

つまり、都市展示では水掛不動が人々を迎えます。農村展示におきましてはモミダワラが天井を回っています。都市人の不安というものと、稲魂の世界をそうした形で表現しようとしたわけです。見えないものを見る形で表現しようとしたわけですが、そこには必ずしも「モノ」として、その通りに存在している、ということとは落差が生じてきます。どこの村に行ってもモミダワラが空を飛んでいる、ということは無いです。

そういう見えないものを見出して、文字によって表現するというのが、ごく普通の民俗誌であるわけです。そしてその時に、形あるものを、その形のまゝに示す手段の一つが写真であり、スケッチである、という形で民俗誌に関わって参ります。

3. 民俗資料と写真資料

(1) 民俗誌における写真

ただ、所謂民俗誌に写真が登場致しますのは、それほど古いことではありません。代表的な民俗学の雑誌であります、『郷土研究』 - これは大正2(1913)年に創刊されます - に写真が登場するのは7巻1号です。これは途中で休刊致しまして、復刊されたものです。大正時代のものには、写真はございません。7巻1号というのは昭和8(1933)年1月号になります。

所謂民俗誌で最も早いものの一つは、小池直太郎『小谷口碑集』(「爐邊叢書」郷土研究社、大正11(1922)年)であろうかと思われます。小さなものなのですが、その口絵として6枚程の写真が載せられています。そのうちの1枚が小正月のモノヅクリの写真になります(図1)。これは、本文中の解説では中々イメージしにくい、という事で口絵が添えられる訳ですが、その解説に該当致します箇所は、こんな風に書かれています。「此地方の物作りで一風變つた作法は、直径二尺乃至三尺もある巻藁を作り、その輪の上へ胡桃の木でいろいろの農具類(鍬・萬能・幅廣・代車^{しろぐるま}・鎌・山刀・鋸等)、履物類什器類の形を小さく拵へたのを立て、真中に繩を張つて、立臼の模型及びケイダレ(紙幣^{ぬま})を吊し、これを出入の土間から茶の間へ上り端の大黒柱に近く、馬物(馬の飼料)を煮る竈の上方へ吊るのである。その後方の梁へは、半紙へいろいろの文字や繪を描いたものを貼り下げる。」と書かれています。つまりは口絵写真の下のご

ざいます様に、「129 頁参照」ということになる訳ですね。文字表現されたものよりわかりやすくする為の、補助的資料として写真が使われており、いふなれば、「百聞は一見にしかず」という事でしょう。

しかし、こうした写真の存在というのはまだ稀なものであるといっても良からうと思います。それだけに貴重な資料です。これより 10 年程後なんですけれども、昭和 6 (1931) 年刊行の同じ地域を対象とし致しました『北安曇郡郷土誌稿 年中行事篇』の、ものつくりの記事にはスケッチが添えられております(図 2)。しかしここには、巻きわらの飾り方の記事は見当たりません。分解いたしまして、一つ一つのつくりものがスケッチされています。どちらの方がわかりやすいか、ということになる訳ですね。個々のものをここでは取り出して示す。そして『小谷口碑集』の方は実際に使われている様子を写真で示している、ということになります。『北安曇郡郷土誌稿 年中行事篇』の中にも口絵に 3 枚の写真がありますがけれども、本文中に写真は一切使われておりません。こうしたスケッチだけです。いふなれば、民俗誌の中で写真を使うことはごく稀で、寧ろこの時代にはまだスケッチが主流であった、といって良いんだらうと思います。

『北安曇郡郷土誌稿』とほぼ同じ頃、田中喜多見の『山村民俗誌』(一誠社、昭和 8 (1933) 年)が出版されています。これには柳田國男の序があります。これも、本文中はスケッチだけが載せられています(図 3)。これは、焼き物を積んで置いてある様子です。わかりはよくありませんけれども、一応描いてある。要するにこんなものですよという、概念的な、形だけを示しているわけですね。こういう状況であるならば、写真の方がよほど分かりやすい、ということなんですけれども、こういうものが主流であるわけです。これは個人のものですけれども、もっと規模の大きな、民俗誌的なものもまだスケッチです。

この時期からはちょっと遅れますけれども、大きな、民俗誌的なものとしましては柳田國男編の『山村生活の研究』(民間伝承の会)が昭和 13 (1938) 年に出ています。よくご承知の様に、所謂全国的な調査を行ないました、学史上記念すべき調査の成果ですが、調査項目ごとにまとめられています。これにも写真は使われておりません。非常に簡単なスケッチだけです。こういう傾向というのは、戦後になりましても同じ状況です。昭和 26 (1951) 年に、各調査地点毎の民俗誌叢書というものが出されます。

大間知篤三の『常陸高岡村民俗誌』(刀江書院 昭和 26 (1951) 年)に掲げられておりますものもスケッチです(図 4)。これを見ますとどうも写真を撮って、その写真をトレースしたものではないか。あるいは、それに基づいて作図したものではないか、という風に思われます。調査・研究の進展の中で、写真等の画像資料の有効性というものを十分認識しながら、経済的、技術的な理由等によってなんでしょう、写真を十分に取り込む事が出来なかった、ということなんだらうと思います。

しかし、こうして見て参りますと、そこで取り扱っているものはやはりモノですね。モノを写し留める。その手段として写真が用いられる。あるいはスケッチが用いられる、ということが出来ようかと思えます。モノさえそこに写し取ることが出来るならば、写真でなくてもスケッチであっても十分だ、ということです。

こういうあり方というのはかなり一般的でして、民俗学研究所編の『年中行事図説』(岩崎書店、昭和 29 (1954) 年)にも、一つの行事が写真とスケッチの両方で示されております。これは、ナマハゲですね(図 5)。写真が使えれば写真の方が良いのか。それとも、スケッチの方がわかりやすいのか、ということになりますが、どちらとも一概には言えない様な気が致します。

これは小正月の火祭りですが、同じものが 3 枚、『年中行事図説』の中にあります。これは色付きのもので、口絵に出てくるものですね(図 6)。

これも小正月の火祭りの絵になりますがこの頁は全部スケッチになります(図 7)。

次に、これは、小正月のつくりものです(図 8)。これは写真ですが、写真でなくても良いということにもなります。ただ、段々にこういう資料写真という様なものが集まって参りますと、写真を使う機会も増

えてくることとなります。

その一つの集成が、昭和 30(1955)年に作られました、民俗学研究所編の『日本民俗図録』(朝日新聞社)です。これはその代表的なもので、各項目毎に写真が掲げられております。項目毎ですから、各地の資料を比較するのがかなり容易になります。

これは田植えを各地でどのように行っているか、という様子がわかります(図 9)。しかし、これが正条植えであるとかという様な説明は一切ここにはありません。

これは子供の育児の様子ですがイズメに入れてあります(図 10)。そのイズメの様子等も各地の比較ができる。ちょっとご注意頂きたいのは、全部子供が入っているということですね。子供が入っているということは子供の顔が見えるということです。それから、イズメの中にどういう詰め物があって、どういう形で子供が入れられているかということがわかるということです。

これは若者宿です(図 11)。若者宿は建物なんですけれども、その中での男と女の集団のあり方が示されているということですね。写真ですけれども、こういうものを組んで入れてありますと、どうもモノだけではない。もう少し違うものを表している。あるいはそこから読み取ることが出来る、ということが出来るわけです。

これは麻の栽培から糸にするまでのものです(図 12)。今は、麻は大麻 - アヘン - の原料になるというので一切栽培されていませんけれども、当時、ごく普通に見られた情景ですね。これも人がここにあります。これは、麻の長さだとかというものの一つの縮尺になるでしょうけれども、もう一つは、それがモノだけじゃなくて、コトにまで展開させようという意図がある様な気が致します。

これは、呪いで、コト、あるいはモノなんですけれども、呪う心持ちというものが、この中に入ります(図 13)。これをどう読み取るかというのは、また別の問題ですが、様々な様相を写真によって把握しようとする意図が、こういうものの中には見られる。つまり、写真は補助的なものとしてだけではなくて、写真を中心としてある一つの世界を示そう、という様な意向が読み取れるだろうと思います。

(2) 民俗写真集

これは民俗写真集と呼ばれるものですが、その動きは昭和 10 年代から見られます。一番早いものが、熊谷元一の『会地村 - 一農村の記録写真 - 』(朝日新聞社、昭和 13(1938)年)という写真集です。戦争が激しくなりはじめる頃に出されたものですが、最も早く作られた民俗写真集といっても良いだろうと思います。ここにはモノだけではなくて、時代や、人々の気持ちをも写し撮ろうとする、そういう意向を見て取ることができます。

これは正月の子供ですけれども、羽つきをしている様子だけではなく、顔の表情、あるいは遊んでいる情景というものを写しています(図 14)。

これは、彼岸なんです、お墓は出てこないんですね。お参りしている姿は出てこない(図 15)。彼岸参りに行く老人の姿の中に、その彼岸に対する人々の、何かを写し取ろうとしている様です。

昭和 19(1944)年に出版した、柳田國男・三木茂の『雪国の民俗』(甲鳥書林)も同様のものです。これが『雪国の民俗』の第 1 頁です。出てくるのはモノではなくて、人の顔なんです(図 16)。ここから何を読み取るか。つまり、この民俗誌の中で、この写真を通して何を表現したかったのか、ということが問題になるだろうと思います。やはり気持ち、ココロ、というものを写し取ろうとしているのではないかという風に思います。その生活の厳しさというのは、顔の皺でもよくお分かりだろうと思います。その次の頁に顔が幾つか出てくるんですが、次が手なんです(図 17)。手を並べることによって、何かを主張しようとするわけですね。これは後でもう一度御覧頂くつもりでおります。具体的なモノやココロではなく、人の体の

一部を切り取って、何かを表そうとする。言わばこれらは日常態、つまり生活の「ケ」の部分を書し取ろうとするわけです。この『雪国の民俗』の中にはそういう「ケ」の部分が沢山出てきます。

これは節分の豆まきです(図 18)。一升枧に入れた豆を撒くだけではなくて、正装していますね。紋付羽織です。これも説明の中には、あまり表現されていないのですけれども、一枚の写真の中で、そういう、行事にかける人々の気持ちというものを読み取ることが出来る訳です。

これは文字通り「ケ」ですね。労働です。稲刈り。だからこれは忙しい時の子供の世界です。子供達が小さな子供を見ている。そして親達は、子供に背を向けて仕事をしている(図 19)。他にはこのような表現はありませんが、ここから何を読み取るかですけれども、かなり色々な情報を読み取ることが出来ると思います。逆にいえば、こうした写真はいろいろな情報を示すことが出来るということなんだろうと思います。

これはココロです。この写真から何を感じるかですね。一つ一つの手だとか、色々なものをさびれた祠のところに供えている(図 20)。こういう情景で何かを示そうとしている、いわばココロを書し取って表現している、といっても良いんだらうと思います。

(3) 行政史(誌)『民俗編』

最近の行政史(誌)『民俗編』でも、写真資料 - 画像資料 - が沢山使われております。これは、対象とする読者が基本的に住民ですし、若い世代にもわかるようにということで写真が多く使われることになりました。

私に関わりました『民俗編』等でも、大体中学二年生から理解できる。つまり、義務教育が修了しない者でも理解できるということの一つの基準とする事が普通でした。という事になりますと、世代間におけるモノやコトやココロの違いの落差をどういう風にして埋めるか、ということが問題になり、そうした時に画像資料が使われることが多いわけですね。

現在、生活が大きく変化する中で、直近の過去のでありまして、行われなくなったことが多く、それに伴って具体的なものもあまり目にしなくなったものが沢山あります。コタツは今ありますけれども、コタツに「おき(燠)を入れる」と言ってもその「おき」がわからない。当然「じゅうのう(十能)」がわからない。犬が後ろ足をあげるのとは何か、といった時に、神様が五徳の足を一本取って与えて下さった足だから勿体無い、といって後足をあげるという民話も、「五徳」がないと全く想像もつかない、という様にモノが違ってきている。その為に、生活事象を文字で表現しただけでは全く解からないということが出てきます。そこでまず資料補助、つまり文字表現の補助として、写真が用いられる。先程申しました「百聞は一見にしかず」ということになるわけです。この場合はまず目で捉えることが出来る、個別の形あるモノ・コトというものが対象になります。

こうした写真は記録資料ですから、撮影した場所・日時等というものが必ず明記されなくてはならない筈なんですけれども、案外書かれていないものがあります。生活そのものである民俗は、どこにでもあるものですから、あえて時や所にはそれほどこだわらなくても良かった時代がありました。ところが、変化の激しい現代では、写真の持つ歴史的な資料性が従来よりも高くなりました。つまり史料の方にウェイトがかなりおかれてくるということになりました。変化や地域性を知る為にも、出来るだけ詳細なデータが明記されることが必要になるわけです。

これは解説を読むとわかりますけれども、写真だけを見ますと何を写したのかがよくわからない、という事になります。ここにサカイウツギがあります。サカイウツギというのは耕地の境のところに空木という木を植えるんです。この奥にありますのがサカイウツギですね。その前の方には境標が置かれているんです(図 21)。この写真だけで変化がわかるんです。かつては境標がなかった。空木だけだった。ところが、

時代の変化の中でこういう境標が立会いの上で設置される様になった、ということになるわけです。しかしこのままですと、この木が何のことかわからなくなって、切られてしまうという可能性があります。いつ位まで、こうした習慣があったかということになりますと、平成3(1991)年に撮ったという記録によって少なくともこの時点までは存在していたという歴史資料にもなり得るということになるわけです。

変化や地域性を知る為に、出来るだけ詳細なデータが必要になってくるということですね。どこにでもあったものが、どこにでもある、ということにならなくなってくるということです。単独の事象ではなく、背景と共に写された事象がどういうものであるかというのは、実はもう既に生活絵引きが作られています。須藤功さんの写真に小川直之先生が詳細な解説をつけております。これは記録資料として、生活の中に存在するモノとコトとを認識しようしたものだと思います。

ただ、既に触れております様に、画像資料としての民俗写真というのはそれだけに留まらないのではないだろうかと思います。

4. 民俗写真(画像資料)の可能性

勿論、モノと事象 - コト - とを記録するという役割を軽視する訳ではありません。基本的には画像によって、民間伝承の固定化・資料化を図るという上では非常に有効な手段であると思います。

ただ、画像・写真として切り取られた民俗事象はそれのみに留まらずに、そこから民俗的生活世界を再現することが出来ます。つまり、単に固定的な存在だけではないということです。

どうということかと申しますと、民俗的世界を再現することが出来るということは、つまり、作る方から見れば、民俗誌としての写真を撮ることが出来るということです。題材・対象を選ぶ一定の意思 - 意図 - を持って臨むということになるわけです。勿論シャッターを切る時には誰でも対象を選んでるわけですが、さらにそれをある意図の下に行なうということなんですね。

これは先程のものに関連するんですが、何を写したかわかりでしょうか。この2枚の写真は同じ場面を写しているんです。これは、空木の木なんです。これを撮影した人は昆虫の研究者なんで、空木にやってくるモンシロチョウを写しているんですね(図22)。ところが、これはそうした蝶が止まるだけのものではありません。こういう撮り方をしますと、これがサカイウツギだ、ということがわかります(図23)。従って、どういう風に切り取ると何が写るかということで、民俗的世界を再現しやすくなるかどうかが決まる、ということになります。

これはありふれた情景ですが、実は、これが表通りで(図24)、これが裏通りなんですね(図25)。一街区裏なんです。こうして並べてみると、街の様相がどういう風に変わっていくのか。どういう風に変わったのか、同じ地域の中での変化を読み取ることが出来る。これは皆さん方が実際には感じているわけですね。渋谷駅から大学へ来る間に、ビルの谷間に古い家が一軒ある。これを比較するとどちらが古い家か、どういう風に建物が変わってきたかというのが一見してわかる。という様な事も、撮り様によっては出来るんだ、ということになります。

写真などの画像資料を作る側で、何を表現しようとするかというときに、独り善がりになる恐れはあるんですけども、モノやコトだけではなくココロをも写し取る事の出来る可能性というものも秘めている、ということです。

写されて示されたものから何を読み取るか。つまり、どういう民俗的世界を再現するかというとき、写真・画像資料を民俗誌として読む(理解する)ことが出来るのではないかと思います。これは読者・利用者側の視点ですが、見方によっては様々な世界をそこから読み取ることが出来る。つまり、見る人の立場や考え方をそこに投影することが出来る、ということですね。

これは長野県下伊那郡阿南町新野です。よくご存知の雪祭り(図 26)の時に焚く松を子供達が集めています(図 27)。つまりこれは新野の伊豆神社を中心としたものです。そこから 200m 位離れた家ではこういうことをやっています。これは、便所の年取りと呼んでいる行事です(図 28)。神社では、神社の神を祭る田楽の祭りが行なわれる。ところが、家では便所を拝んでいる。これが終わってから年取りが行われるんですね。

この雪祭りは非常に有名なもので、時にはここで日本民俗学会が開かれるという程、多くの研究者が行くんです。折口信夫が名付けたことによっても有名ですけれども、この便所の年取りの行事がある事は全く報告がなかったんです。昭和 53(1978)年になりまして初めて報告されました。ですから、新野は雪祭り一色で大晦日、あるいは正月 14 日の夜を迎えるんじゃないで、実はもう一つ、全く性格の違う行事が行なわれているという、いわば立体的なものもこうした写真を並べることによって見る事が出来るだろうと思います。

これは子供を中心にした写真ですね(図 29)。この家は女系三代になります。初めて男の子が産まれた。女の喜びみたいなものがあるのでしょうか。これはもう少し新しいものですが、お七夜の祝いですね(図 30)。家の中における祝いの仕方、喜びの表現の仕方が、こういう組み合わせで読み取ることが出来るだろうと思います。

これは大豆を選り分けているんです(図 31)。こういう写真というのは、調査の時にもあまり問題にならないですね。米のしいなと実の入ったものをどうやって選り分けるか、というのは時々聞くんですけども。虫の喰った豆と丸い豆をどうやって選り分けるかなんてというのはあまり出てこない。こういう、何気ないものを撮っておく、資料化しておく、ということが、民俗世界の厚みというものを見る事が出来るだろう、ということですね。

これは小正月のものです。これは道祖神の祭りです。これを青年達が持って各家を回るんですね。時々一升瓶なんか貰います。それから、お賽銭を貰っていますね。これは若者達のお正月の道祖神のお祭りです(図 32)。これは、道祖神碑の前で厄年の厄落としをしています(図 33)。箆を使っている女性が厄年の人ですね。村の人に集まってもらって、酒を飲んでもらっています。小正月のあり方というものをこういうところからどうやって読み取っていくか、ということは問題なんです、いろいろなことを読み取ることが出来るのではないかと思います。

これは手の表情だけで何がわかるか、というので、急いで手近なところで手を集めてみました(図 34)。いかにも仕事をしていない手ですね。肉体労働をしない手です。しかし、爪はそんなに伸びていません。手の表情によって、その人の生活のあり方や、時代の変化みたいなものが、何か読み取ろうと思えば読み取ることが出来るんじゃないかと思います。指の長さや仕事の内容というのは対応するのか、ということなども考えられます。

つまり、どういう写真を撮るか。その写真をどういう風に見るか。そこに如何に豊かな民俗的な生活世界を作り上げることが出来るか。そういうことも考えていく必要があるんじゃないか、と思います。それによりまして、画像が事象の記録という機能だけで留まるのか。それとも民俗誌にもなり得るのか、という事が決まってくるのではないかと思います。出来れば、民俗誌としての画像資料の活用、ということをもっと考えて良いんじゃないか、というようなことを考えております。

それではお前は具体的に何をしているんだ、と言われてしまうと困ってしまいますけれども、私も、そういう可能性をこれからも探っていきたいと思っております。以上です。

図版出典

- 図1 小池直太郎編 大正11(1922)年 『小谷口碑集』郷土研究社 巻頭
- 図2 信濃教育会北安曇部会編 昭和6(1931)年 『北安曇郡郷土誌稿』第3輯 郷土研究社 巻頭
- 図3 田中喜多見 昭和8(1933)年 『山村民俗誌 - 山の生活篇 - 』 一誠社 p82-83
- 図4 大間知篤三 昭和26(1951)年 『常陸高岡村民俗誌』刀江書院 p111
- 図5 民俗学研究所編 昭和29(1954)年 『年中行事図説』 岩崎書店 p99
- 図6 民俗学研究所編 昭和29(1954)年 『年中行事図説』 岩崎書店 巻頭
- 図7 民俗学研究所編 昭和29(1954)年 『年中行事図説』 岩崎書店 p93
- 図8 民俗学研究所編 昭和29(1954)年 『年中行事図説』 岩崎書店 巻頭
- 図9 民俗学研究所編 昭和30(1955)年 『日本民俗図録』 朝日新聞社 p54
- 図10 民俗学研究所編 昭和30(1955)年 『日本民俗図録』 朝日新聞社 p120
- 図11 民俗学研究所編 昭和30(1955)年 『日本民俗図録』 朝日新聞社 p115
- 図12 民俗学研究所編 昭和30(1955)年 『日本民俗図録』 朝日新聞社 p37
- 図13 民俗学研究所編 昭和30(1955)年 『日本民俗図録』 朝日新聞社 p166
- 図14 熊谷元一 昭和13(1938)年 『会地村 - 一農村の記録写真 - 』 朝日新聞社 p12
- 図15 熊谷元一 昭和13(1938)年 『会地村 - 一農村の記録写真 - 』 朝日新聞社 p20
- 図16 柳田國男・三木茂 昭和19(1944)年 『雪国の民俗』 甲鳥書林 図版1
- 図17 柳田國男・三木茂 昭和19(1944)年 『雪国の民俗』 甲鳥書林 図版18~20
- 図18 柳田國男・三木茂 昭和19(1944)年 『雪国の民俗』 甲鳥書林 図版46
- 図19 柳田國男・三木茂 昭和19(1944)年 『雪国の民俗』 甲鳥書林 図版160
- 図20 柳田國男・三木茂 昭和19(1944)年 『雪国の民俗』 甲鳥書林 図版353
- 図21 長野県史刊行会 平成3(1991)年 『長野県史 民俗編』第5巻(総説) p229
- 図22 那須野雅好氏撮影 平成15(2003)年 長野県南安曇野郡三郷村
- 図23 "
- 図24 著者撮影 平成11(1999)年 長野県長野市
- 図25 " "
- 図26 " 昭和51(1976)年 長野県下伊那郡阿南町
- 図27 " 昭和51(1976)年 "
- 図28 " 昭和51(1976)年 "
- 図29 昭和15(1940)年 長野県長野市
- 図30 著者撮影 昭和47(1972)年 "
- 図31 " 昭和52(1977)年 "
- 図32 " 昭和52(1977)年 長野県上伊那郡戸隠村
- 図33 " 昭和47(1972)年 長野県木曾郡穂川村
- 図34 " 平成15(2003)年 東京



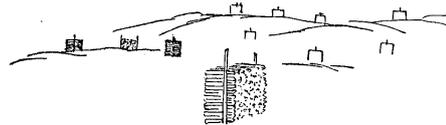
(照参頁九二一) リ作物の方地島鹽村城北

図 1



図 2

所たつ張を梯の薪に山い近里



例一のみ積木春

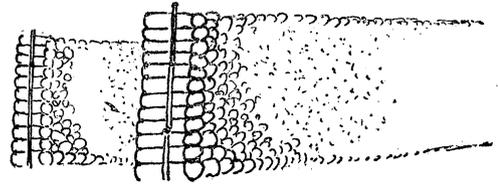


図 3

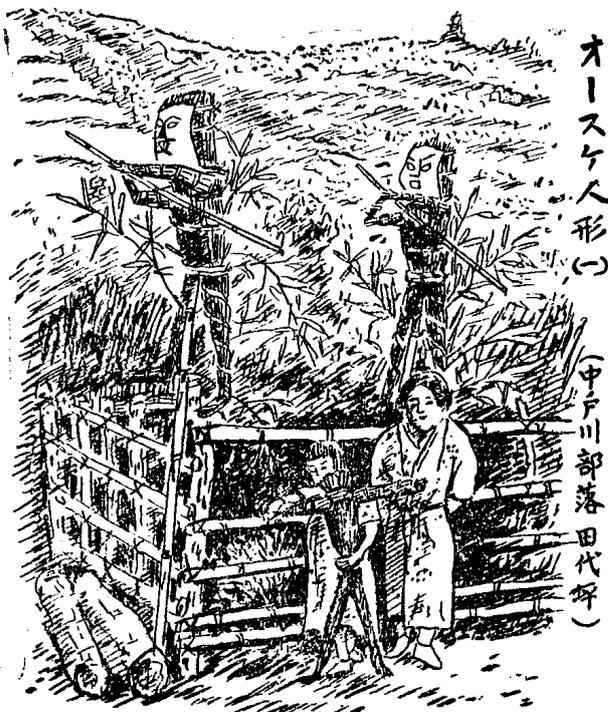


図 4



図 5



図 6



小正月の火祭は、一般に東北地方に例が少ないようである。また九州では鬼火などといって、正月六日から七日にかけて、火祭をする所が多い。

- 1 長野 三九郎
- 2 神奈川 さいとうばらい
- 3 静岡 門入道
- 4 神奈川 門入道
- 5 長野 道祖神

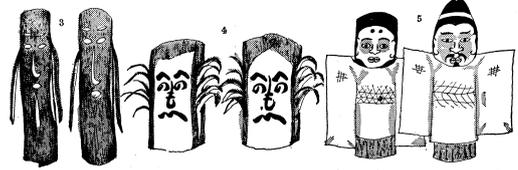


図 7

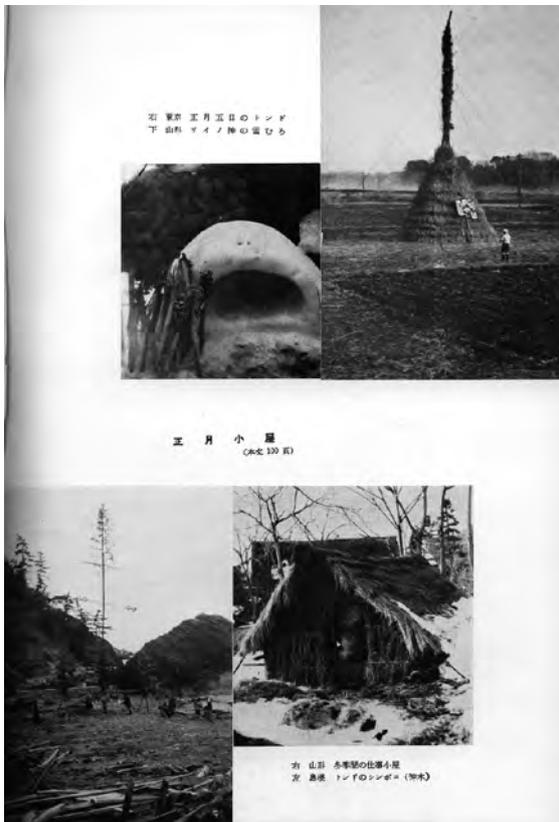


図 8



図 9



图 14



图 15



图 16



图 17



图 18



图 19



图 20



図 21



図 22



図 23



図 24



図 25



図 26



図 27



図 28



图 29



图 30



图 31



图 32



图 33

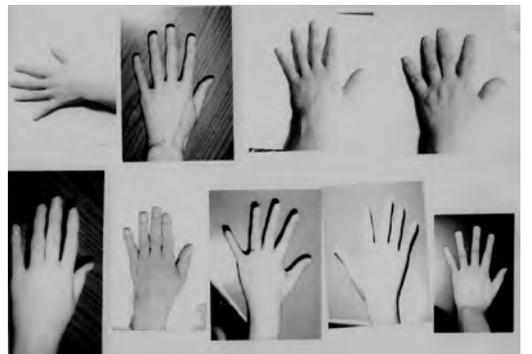


图 34